

初期中世窯にみる特殊器種構成

—常滑窯発生論への展望—

赤羽一郎

1. はじめに

知多半島古窯址群（常滑窯）の発掘調査は昭和30年代以降本格化するが、それらの諸成果に基づいて「常滑窯」の推移に関する研究が続いている。その研究の中核となる古窯とその製品の相対的編年および年代の付与にあたっては、山茶碗・小皿の形態変化を指標とする方法⁽¹⁾、器種構成や古窯分布の変遷を指標とする方法⁽²⁾などがとられてきている。しかし、これらの方法によっても、常滑窯発生の経緯は必ずしも明確にはされていない。その要因には、初期常滑窯において、日用雑器としての山茶碗・小皿・鉢類と後に掲げる諸特殊器種とが伴出する例が少なくないにもかかわらず、両者を包括した器種構成の検討が遅れていること⁽³⁾、山茶碗・小皿の形態変化による分類が、とすれば概括的であることなどがあげられる。その結果、半島中央部における甕窯の出現を、半島全体の陶器生産の流れの中に位置づける作業が遅れているからでもある。

本稿では、この常滑窯発生の経緯を解明するための前提として、(1)山茶碗・小皿の形態変化を更に細かく観察し、また片口鉢口縁の形態変化にも着目する、(2)特殊器種を伴う古窯を抽出し、各々の伴出頻度を検証する、(3)その上で、12世紀代における古窯と製品の編年を試みたい。

2. 日用雑器の形態分類

山茶碗・小皿、片口鉢は、いずれも前代の灰釉碗・小碗・灰釉鉢⁽⁴⁾を継承したものであるが、12世紀に至って量産体制に組込まれていく経過が、それらの形態変化に顕著にあらわれている点に着目してみる。

2-1 従来の山茶碗・小皿の形態分類は、それらの高台の有無と、主に口縁・側面の形状に着目している。ここでは、高台のある山茶碗・小皿については、更に高台底面の付着痕（特に、靱殻）の有無を区分する。高台底面の靱殻付着痕については以前から注目されているが⁽⁵⁾、量産を保證する釉着防止の方法として、また脱殻後の靱の再利用として興味深い。高台のない小皿については、底部の糸切面が台状を呈するもの（以下、「造出底」と呼ぶ。《図3》-2）と、平坦なもの（以下、

系 譜	器 種	備 考
灰釉陶器を継承したもの	広口瓶、短頸壺、広口壺	(須恵器系)
	水瓶(頸部に突帯があり、常滑窯などに散見するタイプ)	(金属仏器系)
	輪花山茶碗・小皿、白磁写山茶碗・小皿、水注、小壺	(中国陶磁系)
中国陶磁を模倣したもの	三筋文壺・経筒外容器・水注・水瓶(鶴首状の頸部を持ち、瀬戸窯に受けつがれるタイプ)、四耳壺、盤など	12世紀に至って中国陶磁を模倣したもの ⁽⁸⁾
その他	瓦、耳皿、子持器台など	

表1 特殊器種の系譜

「ベタ底」と呼ぶ。同一4)とを区分する。この相違の技術的要因は不明であるが、高台のある小皿についてみると、それらの高台は、「造出」部に巻くように付けている例が多いので、一応区分してみた。⁽⁶⁾

また、山茶碗・小皿の中で、器高に比して口径が大きく口縁が鋭く外反したもの(以下、「外反」山茶碗という。《図1》-6)、口縁に輪花を施したもの(《図1》-4、《図2》-7・8)、更には中国宋代の白磁碗を模倣したと考えられる口縁をもつもの⁽⁷⁾(以下、「白磁写碗・皿」という。《図2》-1・2)を区分する。

2-2 片口鉢の形態変化が端的にあらわれるのは、口縁、高台および側面の形態であるが、ここでは口縁の形態変化に着目し、次の三つのタイプに分類する。

Aタイプ;粘土紐巻き上げ成形後の調整の段階で、先端を指で挟み、外反させながらナデ調整によって細く丸く仕上げたもの(《図1》-10・18)。

Bタイプ;先端を押すようにナデ調整しながら、側面に対して直角に近く面取状に仕上げたもので、面取状の口縁が凹面を呈しているもの(《図2》-11・17・19、《図3》-8)。このタイプのものは、器形が半球形を呈するものが多い。

Cタイプ;先端を押すようにナデ調整し面取る点はBタイプと同じだが、面取の面が側面に対して鈍角に仕上げられたもの(《図3》-10・13)。このタイプの片口鉢の側面は、前二者に比して直線的である。

ただし、B→Cへの変化に較べて、A→Bへの変化は著しい印象を与える。あるいは、Cを更に二分して、A→C'、B→C''と考えると、Bの祖形を他に求めることも考えられる。

3. 特殊器種等の伴出頻度

初期中世窯にあらわれる特殊器種は、《表1》示したように、灰釉陶器を継承したもの、12世紀に至って中国宋代の陶磁を模倣したもの、その他、に分けることができる。いま前者だけが含まれている古窯をXグループ、後者だけが含まれている古窯をZグループ、両者が混在している古窯をYグループとする。

3-1 伴出器種表の作成

上記の日用雑器の形態分類と、比較的出土例の多い特殊器種に着目し、管見の及ぶ限り特殊器種を含むことが確認された77古窯について、伴出器種表(《表2》)と、地域別・グループ別古窯数(《表3》)を作成した。

(《表2》)中の数字は古窯数をあらわし、例えば片口鉢Aタイプを含む古窯19の中で、付着痕のない高台をもつ山茶碗が伴出する古窯は10であることを示している。

3-2 グループの若干の特徴(《表4》)

(1)小皿の高台の有無についてグループ別にみると、Xグループでは高台をもった小皿の伴出比率は極めて高い。逆に高台のない小皿では、X→Y→Zの順に伴出比率は高くなる。⁽⁹⁾

(2)片口鉢口縁については、XグループではAタイプが、YグループではB、Cタイプが、またZグループではCタイプの併出例が多い。特に、YグループでBタイプを伴う古窯の多くが東山窯に

伴出器種 出土器種	片口鉢			山茶碗						小皿						広口瓶	短頸壺	壺類	水瓶	三筋文		四耳壺	瓦	古案数		
	A	B	C	高台		形状等		無痕	靱痕	造出	ベタ	形状等		外反	白磁					輪花	複線				単線	
				無痕	靱痕	外反	白磁					輪花	外反													白磁
片口鉢	A	0	0	10	14	3	5	11	10	6	1	2	4	1	2	7	13	8	1	1	1	0	1	19		
	B	0	4	5	7	0	1	3	1	3	5	7	0	1	0	2	4	2	1	6	1	4	6	10		
	C	0	4		2	13	0	0	1	2	6	6	10	0	0	0	1	7	14	3	7	5	4	3	19	
山茶碗	高台	無痕	10	5	2		23	3	6	12	12	10	5	12	4	3	1	12	16	10	0	5	2	2	5	29
	高台	靱痕	14	7	18	23		2	4	12	10	16	9	19	3	2	2	13	22	23	4	8	5	5	9	44
	形状等	外反	3	0	0	3	2		0	2	0	0	0	3	0	0	2	1	0	0	1	0	0	0	0	3
		白磁	5	1	0	6	4	0		4	4	2	0	1	1	2	2	2	4	2	1	1	0	0	0	8
小皿	高台	無痕	10	1	2	12	10	2	4	10		6	1	3	3	3	1	6	10	6	1	2	0	0	1	16
	高台	靱痕	6	3	6	10	16	0	2	5	6		5	8	0	0	2	7	12	7	1	1	1	1	3	16
皿	底部	造出	1	5	6	5	9	0	0	2	1	5		6	0	0	0	3	5	4	1	4	1	2	5	10
		ベタ	2	7	10	12	19	0	1	3	3	8	6		0	1	0	6	9	14	3	7	4	6	12	27
	形状等	外反	4	0	0	4	3	3	1	3	3	0	0	0		1	0	2	1	0	0	1	0	0	0	4
		白磁	1	1	0	3	2	0	2	3	3	0	0	1	1		0	1	0	2	0	0	1	1	1	4
輪花	2	0	0	1	2	0	2	1	1	2	0	0	0	0		1	1	0	1	0	0	0	0	0	2	
広口瓶	7	2	1	12	13	2	2	7	6	7	3	6	2	1	1		10	4	2	2	0	1	2	19		
短頸壺	13	4	7	16	22	1	4	11	10	12	5	9	1	0	1	10		18	3	3	3	1	2	34		
壺類	8	2	14	10	23	0	2	3	6	7	4	14	0	2	0	4	18		6	8	6	4	2	41		
水瓶	1	1	3	0	4	0	1	2	1	1	1	3	0	0	1	2	3	6		3	0	2	0	8		
三筋文	複線	1	6	7	5	8	1	1	3	2	1	4	7	1	0	0	2	3	8	3		5	4	4	15	
	単線	1	1	5	2	5	0	0	0	0	1	1	4	0	1	0	0	3	6	0	5		1	1	10	
四耳壺	0	4	4	2	5	0	0	0	0	1	2	6	0	1	0	1	1	4	2	4	1			5	7	
瓦	1	6	3	5	9	0	0	2	1	3	5	12	0	1	0	2	2	2	0	4	1	5			12	

表 2 伴出器種数量

※ 表2を作成するため採用した古案は、下記のとおりである（・印は、発掘調査をおこなったが、未発表のもの）

東山窯：HG-34、同51、同55、同61（窯内と窯外に区分）、同79、同101、同105、八事裏山1号（A・BとDを区分）、東山210号、瓶杓8号、御影御8号（以上、名古屋市） 猿投窯：OG-1、同6、同12（以上、愛知郡日進町）、・八和田山窯群（西加茂郡三好町）、細口下1号、鳥田7号、鳥田黒石8号、南平部古案群（以上、名古屋市）、石根古案（豊明市） 常滑窯（北部）：社山古案、権現山古案、論田古案、泡池1号、・法秀古案（以上、東海市）、吉田2号（大府市）、八巻古案群、石浜1号、同2号（以上、知多郡東浦町）、梶廻間古案、大知山1号、巽ヶ丘8号（以上、知多市） 常滑（中央部）：龍池1号、同3号、同9号、陶ヶ峯2号、金色東2号、金色3号、同8号、松岡2号、同13号、同21号、同22号、二ノ田2号、同4号、同5号、高坂6号、柴山1号、同2号、清水山1号、同2号、同3号（以上、常滑市）、広輪池1号、椎ノ木1号、長成池1号、大高山5号、十三塚5号（以上、半田市） 瀬美窯：大アラコ1号、同2号、同6号、大沢下1号、同2号、同4号（以上、瀬美郡田原町）、伊良湖東大寺瓦窯（瀬美郡田原町） 瀬戸窯（広義）：釜ヶ洞1号（瀬戸市）、旭浄水場古案（尾張旭市）、松ヶ洞1号（名古屋市）

以上のほか、S-80号（小牧市：同教育委員会ほか「桃花台ニュータウン遺跡調査報告」Ⅱ、1981）、稲田山16号（岐阜県各務原市：同教育委員会「稲田山古案跡発掘調査報告書」1981）、谷廻間2号（岐阜県可児郡可児町：同教育委員会「可児町谷廻間2号古案発掘調査報告書」1978）、緑風台1、2号（兵庫県西脇市：同教育委員会「播磨・緑風台窯址発掘調査概要報告書」1980）を採用した。また、常滑市柴山（柴山東A-2地点）、半田市三池町（三池B-1地点）、同市新野町2（板山大池21地点）、および瀬戸市南山口町愛知県陶磁資料館敷地内（南山8号窯）において筆者らが採集した資料についても採用した。

地区 グループ	常滑窯		東山窯	猿投窯	瀬戸窯 (広義)	渥美窯	その他	計
	中央部	北部						
X	13	8	7	6	3	6	2	45
Y	5	—	5	—	—	1	1	12
Z	8	1	1	2	1	—	1	14
計	26	9	13	8	4	7	4	77

表3 地域別・グループ別古窯数(本稿で採用したもの)

(1)

	小皿		古窯数	μ
	有高台	無高台		
X	35	9	45	0.820 → 0.736
Y	4	7	12	0.578 → 0.089
Z	2	6	14	0.309 → 0.000

(2)

	片口鉢			古窯数
	A	B	C	
X	17	3	3	45
Y	1	5	7	12
Z	0	2	7	14

(3)

	壺類	瓦	古窯数	μ
Y	6	3	12	0.474 → 0.026
Z	10	3	14	0.928 → 0.500
他	2	4	6	1.000 → 0.279

(4)

	三筋文		四耳壺	古窯数
	複線	単線		
Y	8	2	4	12
Z	7	6	3	14
t _≠	0.121	0.045	0.152	

表4 各グループにおける伴出状況

みられる。

(3)各グループについて、壺および瓦の伴出比率をみると、前者は信頼区間の巾はあるもののX→Y→Zの順に伴出比率が高くなる。一方、瓦(軒丸・軒平・鬼瓦の出土例に限った)については、Xグループでの伴出比率が特に低い。上記の3グループに属さないもののうち4古窯は、山茶碗・小皿と瓦が伴出している例で、瓦専焼窯であることをうかがわせるものもある⁽¹⁰⁾。

(4)Y、Zグループにおける中国陶磁を模倣した器種(三筋文を施したものと、四耳壺を例とした)の出土状況を見ると、単線三筋文は、YグループよりもZグループにおける方が出土しやすいといえる⁽¹¹⁾。

以上のことから、次のような推測が導き出される。

①小皿の形態が、高台有→ベタ底に年代差を設けることを承認すると⁽¹²⁾、Xグループの多くはYグループに先行する。また、「表4」には掲げなかったが、「白磁写」「輪花」を伴うXグループの古窯は、Y・Zグループに先行する。

②片口鉢Aタイプは、Xグループに特有のものといえる。Bタイプは、Yグループの形成に相前後して出現する。

③壺類はXグループの古窯にもみられるが瓦類はYグループの形成とともにその生産が開始された可能性が強い。

④複線三筋文が単線三筋文に先行することを承認すれば⁽¹³⁾、YグループはZグループに先行する。

このようなグループの前後関係を整理すると、X→Y→Zとなり、灰釉技法を放棄し山茶碗窯として、灰

釉陶器を継承した特殊器種を併焼してきたXグループの一部分が中国陶磁の模倣によってYグループを形成したことが想定できよう。また、YグループからZグループへ移行は、基本的には灰釉陶器を継承した特殊器種をも放棄しながら、中国陶磁を模倣した特殊器種を残存させつつ、山茶碗・小皿の数量と反比例的に壺の数量を増加させており、壺専焼（甕専焼）に至る過渡的形態を示しているといえよう。

3-3 片口鉢を指標とした検討

伴出器種表による検討の最後に、片口鉢のタイプ別に伴出するいくつかの器種についてその伴出比率の信頼区間を図示した《図4》。この図の黒帯の形態をみると、採用した器種は、①付着痕のない高台をもつ山茶碗、「白磁写」「輪花」、広口瓶のようにA→B→Cと下向くものと、②「造出底」とベタ底の小皿、三筋文のようにB→Cに上向くもの、更に③靱付着痕の高台をもつ山茶碗、短頸壺のように、変動の少ないものに分けられる。このことから、片口鉢口縁は、A→B→Cと推移するものと考えられる。

4. 初期中世窯の相対的編年と年代観

以上のように、伴出器種表に基いて、器種相互の伴出比率とその推移をみてきたが、それを総括して器種構成とその相対的編年、更には年代の付与を試みたい。

4-1 初期中世窯の器種の消長

各図表に示した器種の形態変化と、相互の伴出比率から、次の5グループを設定した。

(1)片口鉢は全てAタイプ。山茶碗・小皿は付着痕のない高台をもち、口縁が強く外反するタイプ、白磁写口縁、輪花技法がみられる。

(2)片口鉢はAタイプだが、口縁の外反は弱まり直線化する。山茶碗には、付着痕のない高台に靱殻付着痕のある高台が加わる。口縁が強く外反する山茶碗はみられないが、その退化形態として山茶碗の内側上部に稜のあるもの（《図1》-15）がみられる。輪花技法は残存するが、白磁写口縁はみられない。小皿は、付着痕のない高台、靱殻付着痕のある高台の双方がみられるが、後者が優位にたつ。複線三筋文は、このグループにあらわれる。

(3)片口鉢はBタイプ。山茶碗の高台には靱殻付着痕が、また小皿には靱殻付着痕のある高台と「造出底」がみられる。輪花技法はこのグループではみられない。瓦はこのグループにあらわれる。

(4)片口鉢はB、C両タイプがみられる。山茶碗の高台には靱殻付着痕があり、小皿は靱殻付着痕のある高台つきのものと「造出底」、「ベタ底」のものが共存する。複線三筋文に加えて、単線三筋文がみられるが、広口瓶はみられない。

(5)片口鉢はCタイプ。小皿は「ベタ底」に限られてくる。三筋文は、複線のものがみられなくなり、単線のものとなる。

この5グループについて、片口鉢（A→B）、山茶碗（付着痕のない高台の消滅、輪花技法の消滅）、小皿（付着痕のない高台の消滅、「造出底」の出現）の形態変化から、第一の画期を(2)と(3)の間に設ける。また片口鉢（Bタイプの消滅）、小皿（通有の高台と「造出底」の消滅）の形態変化から、第二の画期を(4)と(5)の間に設け、各々のグループを、(1)→Ⅰ-(1)、(2)→Ⅰ-(2)、(3)→Ⅱ-

(1)、(4)→Ⅱ-(2)、(5)→Ⅲと段階表示する。その上で、各器種の消長を《図5》であらわした。

4-2 初期中世窯の年代観

この5段階に一定の年代を与えるために各段階を代表する古窯を掲げておく(／の前後には多少の年代差が考えられる)。

I-(1); HG-79⁽¹⁴⁾ / HG-105⁽¹⁵⁾

I-(2); OG-1⁽¹⁶⁾、八巻古窯⁽¹⁷⁾ / HG-51⁽¹⁸⁾、籠池1号窯⁽¹⁹⁾

Ⅱ-(1); HG-61⁽²⁰⁾、／梶廻間古窯⁽²¹⁾

Ⅱ-(2); HG-101⁽²²⁾、陶ヶ峯2号窯⁽²³⁾ / 柴山2号窯⁽²⁴⁾、釜ヶ洞1号窯⁽²⁵⁾

Ⅲ ; 高坂3号窯⁽²⁶⁾ / 籠池3号窯⁽²⁷⁾

さて、今日までに古窯資料によって操業年代が推定されている古窯は、渥美窯の大アラコ古窯群(A.D 1150前後)⁽²⁸⁾、同じく伊良湖東大寺瓦窯(12世紀第4四半期)⁽²⁹⁾である。前者は、その器種構成からI-(2)段階と、また後者はⅡ-(2)と考えられる。一方、平安京左京四条一坊の井戸跡内から寛治五年(A.D 1091)銘の須恵器鉢が、またその「掘りかた」から附着痕のない精緻な高台をもった山茶碗底部が出土している⁽³⁰⁾。これらが完全な共伴遺物とすれば、山茶碗窯の初現としてのI-(1)期は11世紀代に遡る可能性もなしとしないが、速断は避けたい。本稿では、各段階に次のような年代を与えておく。

I-(1) 12世紀第1四半期

I-(2) " 第2 "

Ⅱ-(1) " 第3 "

Ⅱ-(2) " 第4 "

Ⅲ 13世紀前半代

5. おわりに——常滑窯発生論への展望——

これまで、特殊器種を含む初期中世窯とその製品について検討をすすめ、相対的編年と年代の付与にまで至った。ここで上記の諸検討に基づいて、常滑窯発生論の前提となるべき事柄を列挙しておきたい。

(1)上記の各段階の指標とした器種構成を念頭におき常滑窯をみると、I-(1)期に該当する古窯は皆無に等しい⁽³¹⁾。またI-(2)期の特徴を備えた古窯は、半島北部の八巻古窯(群)、石浜2号窯⁽³²⁾、大知山1号窯⁽³³⁾、半島中央部の籠池1号窯などXグループに属する古窯である。また吉田2号窯、社山古窯も、小皿に「造出底」がみられるものもあるが、長期にわたる操業も考慮すれば、この段階には営まれていた可能性がある。このうち、大壺がみられる大知山1号、籠池1号窯を除く古窯は、Xグループの最も古い段階の古窯が東山窯にある限り、それに連なるものとみざるをえない。

(2)Xグループの古窯が広く各地に分散しているのに対して、Yグループの古窯は、東山窯および常滑窯中央部に集中している。このことは、Yグループの形成が東山窯においてまずおこなわれ、常滑窯中央部へ波及していったことが想定される。ただし、常滑窯中央部におけるYグループの形成を、上記のように既に操業されているXグループの古窯に、中国陶磁の成形・加飾技法が導入さ

れた結果とみるか、東山窯で形成されたYグループの陶工群が直接的に進出したかは、判断するに至っていない。ただ、大知山1号窯や籠池1号窯、更には清水山2号窯⁽⁸⁾にみる、大型壺の不整合な押印や口縁の形状は、Yグループのそれとは趣きを異にしており、その限りでは、後者であることも考えられる。

(3)常滑窯中央部におけるⅡ-①、②期における様相は、Yグループの古窯と、Zグループの古窯(既に甕窯の形態をとっている)、Xグループの古窯(大型壺のみられるが、山茶碗の比率も低くない)、および上記のいずれにも属さない山茶碗・小皿、片口鉢のみを製品とする古窯が混在している。

(4)のちの常滑窯を代表する大甕類を焼成した古窯の系譜は、Yグループに求めることができるであろう。また、当初のYグループの形成にあたっては、皇家への寄進系荘園が大半を占める知多半島の性格が示すように、東山窯におけるYグループの形成と同じく、当時の院政勢力が関与したであろうことも想定しうる。今後の課題は、Xグループの古窯における大壺生産の実態をより詳しく、Yグループとの立脚点の異同を明らかにすることであろう。

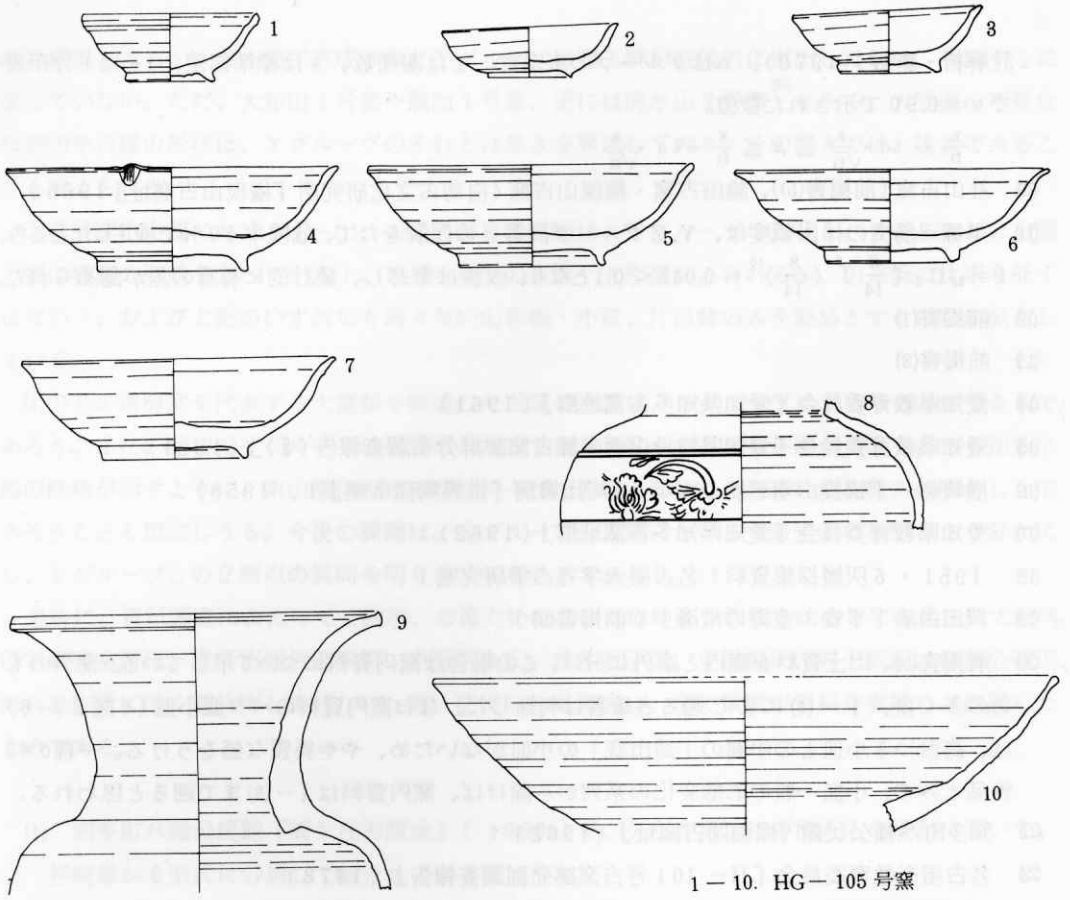
最後に、資料調査にあたってご教示、ご協力いただいた榑崎彰一教授を始めとする名古屋大学考古学研究室諸氏、常滑市民俗資料館、中野晴久氏、浅井紀子氏、立松彰氏、井上武氏、伊藤公禧氏、藤沢良祐氏に厚く御礼申しあげたい。尚、使用した実測図は、全て筆者が資料を実見し、作図したものである。

- (1) 知多町八幡公民館『巽ヶ丘古窯址』(1960)で、久永春男、田中稔らとの検討に基いて、杉崎章が6型式に分類して紹介している。
- (2) 河出書房『日本の考古学』Ⅵ(1967)で、榑崎彰一は、初めて「知多古窯出土編年図」を作成している。
- (3) 東浦町教育委員会『石浜古窯跡群(1)』(1980)で、加藤安信は、山茶碗のタイポロジーと、焼成製品のアセンブリッジという分析方法の必要性を指摘している。本稿は、この指摘に触発されたものである。
- (4) 名古屋市教育委員会『徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告』(1976)で、小島一夫は、NK1-1群古窯の片口鉢に関連して、片口鉢の祖形を灰釉大碗に求めている。本稿では、広久手F谷窯などで発見されている灰釉片口鉢など灰釉陶器最末期出現する鉢類を直接的に遡りうる器種とするにとどめた。
- (5) 知多郡横須賀町『横須賀の遺跡』(1956)の、田中稔の社山古窯の山茶碗・小皿に関する考察など。
- (6) 山茶碗の高台の付け方も、古いタイプのものほど、この方法をとっているように見受けられる。
- (7) 柴垣勇夫「東海地方の灰釉陶器」(愛知県陶磁資料館シンポジウム『平安時代の土器・陶器』発表要旨、1981)
- (8) 榑崎彰一「初期中世陶における三筋文の系譜」(『名古屋大学文学部研究論集』LXXIV 1978)
- (9) 伴出比率の90%信頼区間は、次式により推定した(東京大学出版会『ウィルクス・初等統

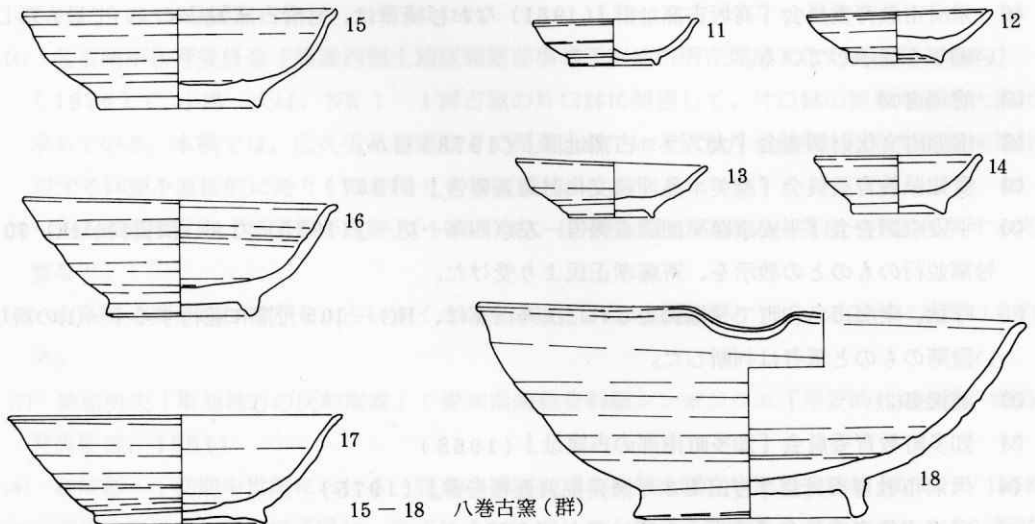
計解析・新版』1970)。nはグループの古窯数、xは器種数、sは標準偏差、 t_{α} はt分布表で $\alpha = 0.90$ で示された数値。

$$\frac{\bar{x}}{n} - t_{\alpha} \cdot \frac{s}{\sqrt{n}} \leq \mu \leq \frac{\bar{x}}{n} + t_{\alpha} \cdot \frac{s}{\sqrt{n}}$$

- (10) 社山古窯(前掲書(5))、論田古窯・権現山古窯(白菊古文化研究所『権現山古窯址』1965)
- (11) 単線三筋文の伴出頻度は、Y.Zグループ同等との仮説をたて、危険率10%で検定したところ、 $t = {}_{12}C_2 \left(\frac{6}{14}\right)^2 \left(\frac{8}{14}\right)^{10} \doteq 0.045 < 0.1$ となり、仮説は棄却し、統計的に有意の差が認められた。
- (12) 前掲書(1)
- (13) 前掲書(8)
- (14) 愛知県教育委員会『愛知県知多古窯址群』(1961)
- (15) 愛知県教育委員会『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(Ⅱ)』(1981)
- (16) 植崎彰一「猿投山須恵器の編年」(河出書房『世界陶磁全集』1, 1958)
- (17) 愛知県教育委員会『愛知県知多古窯址群』(1962)
- (18) 1951・6灰層採集資料(名古屋大学考古学研究室)
- (19) 沢田由治「平安・室町の常滑」(前掲書(16))
- (20) 前掲書(14)、出土資料を窯内と窯外に分け、この場合は窯内資料について示している。窯外のもの多くは、I-(1)にまで遡ると筆者は判断した。なお窯内資料のベタ底小皿(《図2》-6)は、高台つき小皿との中間の「造出底」の小皿がないため、やや異質な感をうける。一種の特殊品とみて、小皿一般の形態変化の系列から除けば、窯内資料はI-(2)まで遡ると思われる。
- (21) 知多町八幡公民館『梶廻間古窯址』(1962)
- (22) 名古屋市教育委員会『H-101号古窯跡発掘調査報告』(1973)
- (23) 愛知県教育委員会『愛知県知多古窯址群』(1960)
- (24) 常滑市教育委員会『柴山古窯址群』(1974)
- (25) 瀬戸市教育委員会・他『釜ヶ洞古窯址群』(1978)
- (26) 常滑市教育委員会『高坂古窯址群』(1981)なお杉崎章は、常滑古窯製品について最も新しい編年を提示している。
- (27) 前掲書(23)
- (28) 田原町文化財調査会『大アラコ古窯址群』(1973)ほか。
- (29) 愛知県教育委員会『渥美半島埋蔵文化財調査報告』(1967)
- (30) 平安京調査会『平安京跡発掘調査報告-左京四条一坊-』(1975)なお、同資料がHG-79号窯並行のものとの教示を、斉藤孝正氏より受けた。
- (31) 昨秋、東海市名和町で発掘調査された法秀古窯は、HG-105号窯に並行するI-(1)の新しい段階のものと筆者は判断した。
- (32) 前掲書(3)
- (33) 知多町教育委員会『知多町南部の古窯址』(1968)
- (34) 大府市教育委員会『吉田第2号窯発掘調査報告書』(1975)
- (35) 常滑市教育委員会『清水山古窯址群』(1980)

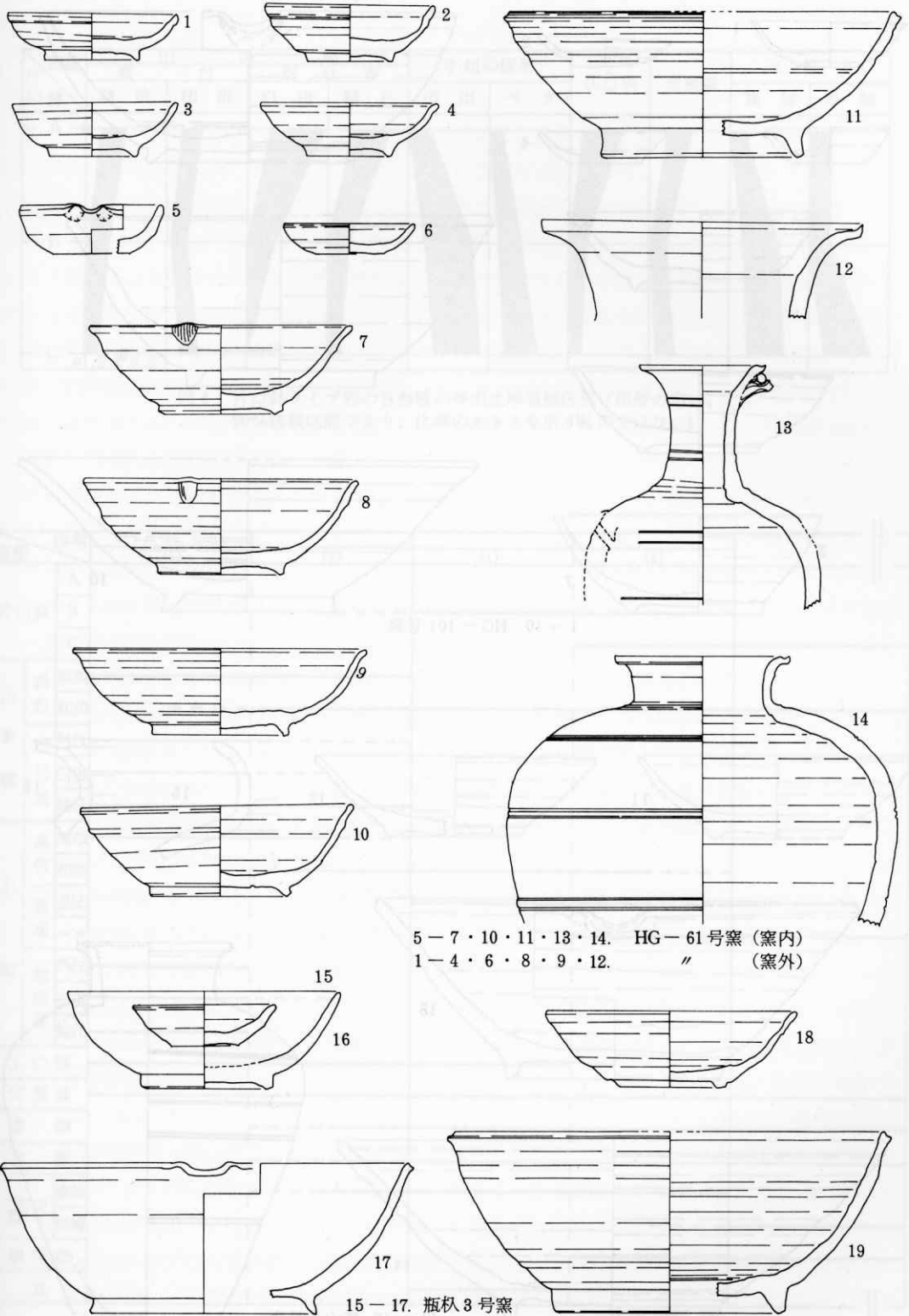


1-10. HG-105 号窯



15-18 八卷古窯(群)

图1 古窯資料(1) 縮尺=8:1/8·他:1/4

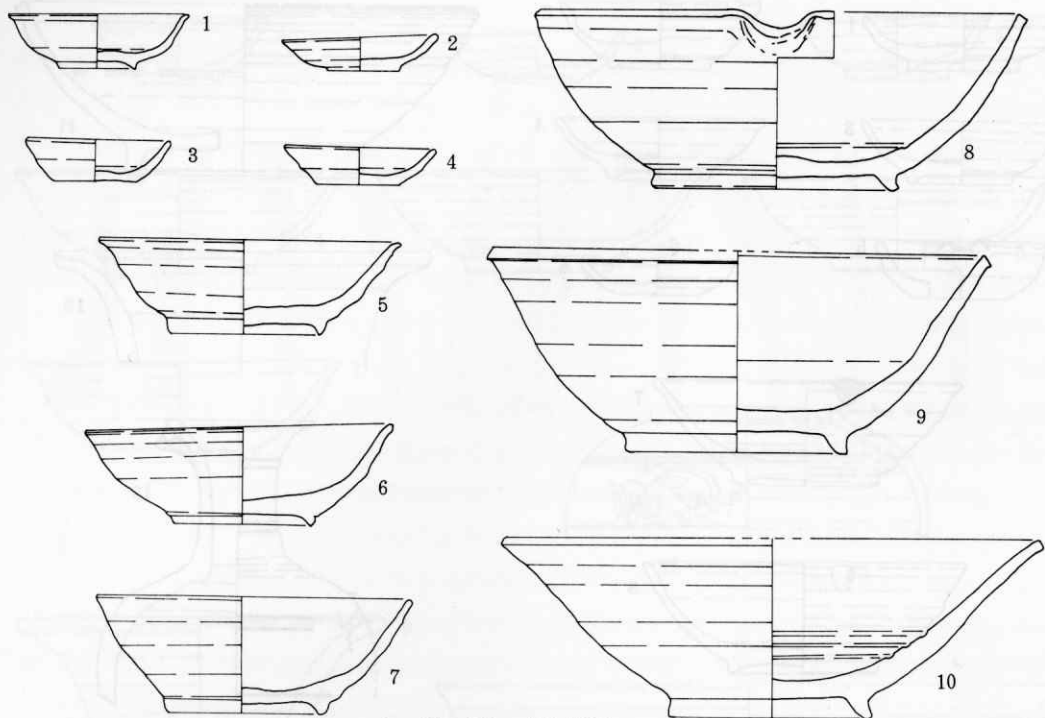


5-7·10·11·13·14. HG-61号窯 (窯内)
 1-4·6·8·9·12. " (窯外)

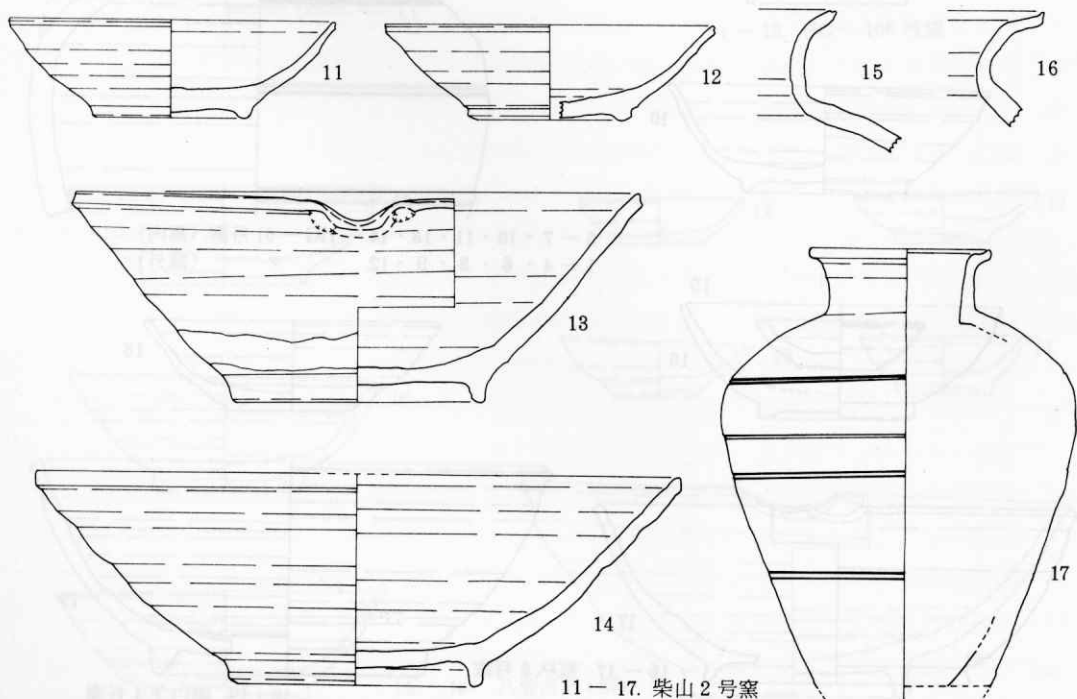
15-17. 瓶杓3号窯

18·19. 細口下1号窯

図2 古窯資料(2) 縮尺=1/4



1-10. HG-101 号窯



11-17. 柴山 2 号窯

图 3 古窯資料(3) 縮尺=1/4

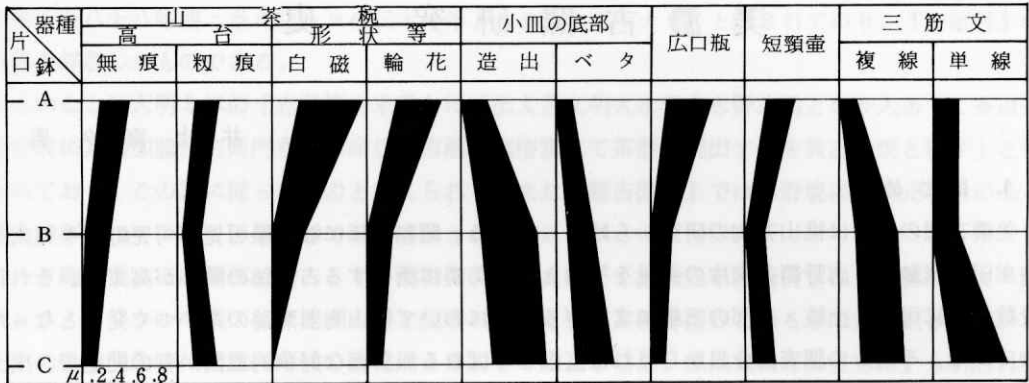


図4 片口鉢タイプ別の各器種の伴出比率信頼区間（黒帯の中は、90%信頼区間であり、比率の大きさを示すものではない）

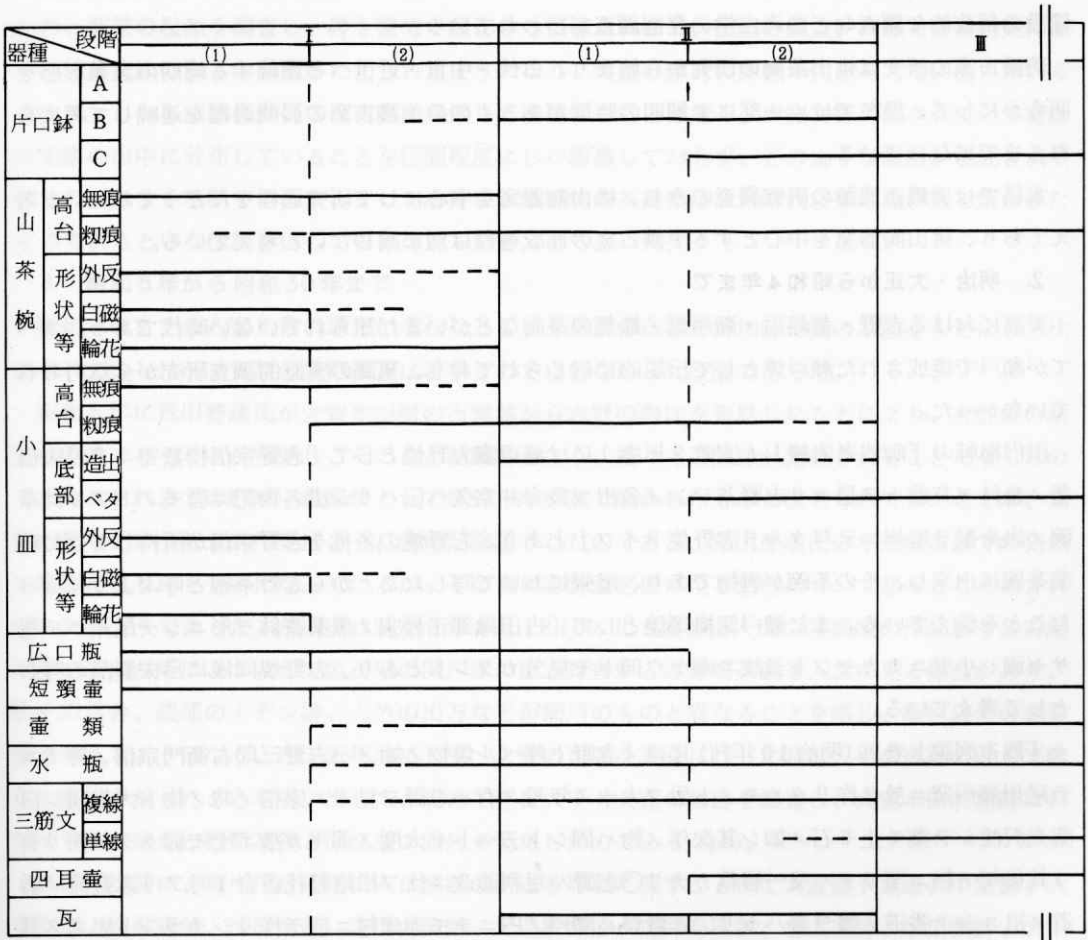


図5 各器種の消長（破線は、存在の可能性あるいは退化残存形態を示す）